

農業経営の全体を可視化 ～出来ることから無理のない経営改善を継続する～

採択事業者名

テラスマイル株式会社

コンソーシアム構成員

実装先:株式会社百姓百品村

勉強会の実施概要

勉強会の目的	データ駆動型農業への興味関心を高め、県内での普及を加速させる。
勉強会の当初のゴール想定と結果	大洲市の認定農業者に向けて、データ駆動型農業の普及を行う予定であったが、当初の予定よりも多くの生産者が興味を示し参加した。
参加者	大洲市近郊の生産者 22名 (認定農業者も多く参加)
協議アジェンダ	大洲市近郊の生産者にデータ駆動型農業の事例紹介を通して、考え方を伝えし、自らも実施したいという意識を持ってもらえたか、アンケートにて意識の確認を行った。
データに基づく協議ポイントの整理	「データ駆動型農業」の普及が目的である為、「データ駆動型農業」を認知していただくと共に、導入の意識をどの様に上げていくのか、どういった部分が「データ駆動型農業」の実施を妨げているのかなども吸い上げる。
主なデータ項目	栽培関連データ(収量、気象、作業時間、作業内容、作業者)、販売関連データ(販売先別の売上、取引量、送料)等
協議におけるガイドライン(含む具体例)	「データ駆動型農業」により、「勘」や「経験」に依存した農業から脱却し、再現性の高い収益モデルを各生産者が描くことが重要。また、生産者の高齢化も有り、それらをいかに継承するのもポイントである。「データ」と言う目に見える形に可視化することで、個人の感覚から脱することが出来る。また、気にしていなかった部分が見え、効率化を進めるきっかけとなりうる。
「実装成果」実現に向けた示唆/考察	興味はあるが、取り組みに踏み切れない理由として、「費用対効果が見えない」「新たにデータを取得するのが大変」と言った声を多く頂いた。最初から、全てをデータで見える化するのではなく、出来ることから始めることで、一歩目を踏み出すことも大切である。



データ活用・協議の具体例

重要指標例	各作業者の、作業の実態が把握できていない → 作業の「ムラ」「無駄」を見つけ効率化 = 「どこで」「何を」「どれだけの時間」行ったのかを把握し、改善点を探る。		
	実装前	実装後	
	データ取得	作業日報としてどこで何の作業を行ったのか記載	・「誰が」「どこで」「何の作業を」「どのくらいの時間」行ったのかを把握する ・「アグリノート」などのツールを利用することで、入力を簡易にする
	データ利用	・ 自前のノートに記録をまとめる	・ 取得したデータをRightARMを用いて分析 「作業内容と作業時間」 ・ 「作業場ごとの作業内容と作業時間」 「作業員ごとの作業内容と作業時間」 などをグラフで可視化する
	実行	・ 「勘」「経験」をもとにした、自身の「段取り」を中心に営農を行う。 ・ 記録したデータは何かあった時に確認する程度	・ 自身の段取りに「ムラ」「無駄」が無いのか確認する ・ 「繁忙期の作業を、少しでもずらすことが出来ないか？」など、視覚的に見えることで、データを踏まえたからこそ、次の改善点を確認。
協議	・ 毎日の作業の記録だけでは、作業の効率化まで持っていくのは難しい ・ 他の生産者と話しても、「感覚」での話しか出来ない	・ 上記でグラフとして可視化されるため、他の生産者とのディスカッションの材料となりうる。作業の段取りの継承が、より可能となった。	

データ活用・協議による成果

作業の最適化に向けて、下記の通り、作業段取りの変更を実施		
項目	これまで	データ利活用・協議を踏まえて
作業段取り	各個人の「勘」「経験」で、作業を計画行っていた	データの可視化で「篤農家」との差異を認識し、真似出来る部分から段取りを真似し、作業効率化